玉皇廟遺跡における遺物の面的広がり

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14398

玉皇廟遺跡における遺物の面的広がり

八木　聡（金沢大学大学院）

はじめに

筆者は、金大考古 61 号において、燕山南麓の北方系青銅器文化に属する玉皇廟遺跡を遺構および副葬される動物骨の面から考察を行い（八木 2008）(1)、小田木の研究（小田木 1997）を基にして他地域の北方系文化との比較を行った。結果として、他地域との共通性と玉皇廟遺跡の独自性を明らかにすることができたが、本稿においては玉皇廟遺跡の埋葬習俗について、遺物の面的な広がりから考察を行っていく。

出土遺物の検討

ここでは、玉皇廟遺跡における遺物の出土位置をもとに考察を行うが、本題に入る前に遺跡の立地について述べておく。玉皇廟遺跡は、北京市延慶県にあり、軍都山の南側斜面に立地している（Figures 1,2）。全



Figure 1　玉皇廟遺跡周辺図

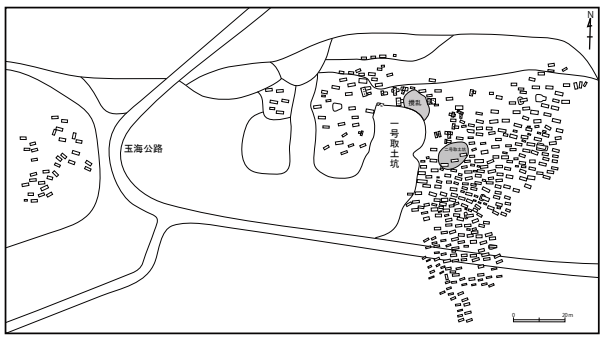


Figure 2　玉皇廟遺跡全体図
近代墓



Figure 3　山戎文化陳列館

部で 400 基の墓が確認されているが、現在遺跡の跡地には山戎文化陳列館が建てられており、遺跡北東部の墓 10 基が復元されている（Figure 3）。筆者が 9 月中旬に訪れた時には、背の低い草木が繁茂していて、緑が豊かな印象を受けた。遺跡を大きく二分するように玉海公路が通っており、本論では便宜的にこの玉海公路より西の地区を西部地区、玉海公路から一号取土坑北側までを中央地区、一号取土坑より東側を東部地区とする (2)。

動物形飾金具

玉皇廟遺跡で出土する動物形飾金具は、大きく虎形・馬形・犬形の 3 種類に分類することができる。材質は、18 号墓出土の虎形飾金具が金製品である以外は、全て青銅製である。

宮本一夫は、燕山地域の北方系文化の特徴として虎形飾金具の出土を挙げているが（宮本 2000）、玉皇廟における虎形を含めた飾金具は、以下に述べるような出土状況を見せている（Figure 4）。

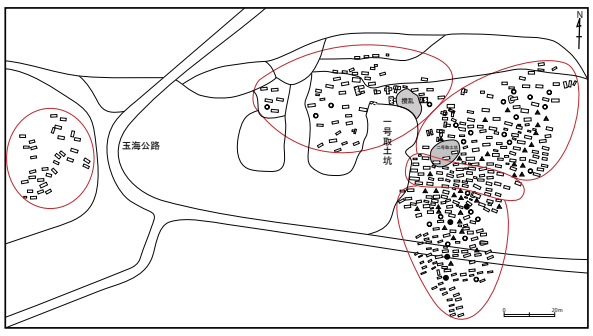


Figure 4　動物形飾金具
○虎形　▲馬形　●犬形　近代墓

まず、飾金具を全く出土しない西部地区とそれ以外の地区に大別できる。そして、飾金具の出土は特に東部区域の北部と南部に集中しており、両地域にはさまれる墓では、飾金具がほとんど出土しないという傾向を見せる。出土する飾金具の型式も地域ごとに違いが見られる。報告書の中で犬形とされている飾金具は、合計で 4 点確認されており、その全てが東部地区南部からのみ出土していることが分かる。

反対に虎形のものは最も普遍的に出土が見られる。中央地区の墓では、全体の出土個数は少ないものの出土する飾金具の全てが虎形のものである。

短剣

ここでは、遺跡から出土した短剣を鐔・柄・柄頭のつくり、文様によって、鐔に獣面を施す獣面型、柄頭に二つの円を並べる双環型、柄頭に蛇の装飾を施す蛇型、鐔が屋根形で柄頭に動物紋を施す動物紋型、柄頭が環状になる環頭柄頭型、柄頭が杯状になる杯状柄頭型、柄と柄頭が格子状の透かしになる格子状透かし型の七つに分類する。

報告書によれば、短剣を出土する墓は全て男性の墓で、一基に一本ずつ副葬している（北京市文物研究所 2007）。各短剣の出土状況からは、上記の飾金具と同様に型式ごとのまとまりを指摘することができる（Figure 5）。まず西部地区は、地理的に他の発掘区域から離れているだけでなく、短剣の出土数が極端に少ない。また出土する短剣の型式を見ても、3 本中 2 本が北方系の短剣というより、中原の影響を受けて造られたように思われる杯状柄頭型であり、他の発掘区域とは異なる出土状況が窺える。

獣面型の短剣は、東部地区でも出土が見られるが、12 本中 8 本が中央地区に集中しており、密集の具合



Figure 5　短剣
○獣面型　●双環型　△動物紋型　▲蛇型
◇環状柄頭型　◆杯状柄頭型　▽格子状透かし型　近代墓

からもひとつのまとまりとして中央地区を捉えることが出来る。

東部地区は、大きく南北に分けることが出来る。東部地区の北部は、獣面型、杯状柄頭型、環頭柄頭型、格子状透かし型、動物紋型、双環型が出土している。密集の具合から見れば、東部地区北部は更に二つのま

とまりに分けることができるかもしれない。

一方東部地区の南部は、蛇型、動物紋型が集中して出土している。特に蛇型はこの区域からのみ出土しているが、動物紋型もそのほとんどが東部地区南部から出土しており、東部地区北部とは明らかに異なる様相を見せている。

土器

玉皇廟で出土する土器は、大きく夾砂系土器と泥質系土器に分類できる。221 号墓で泥質土器が 2 点出土している以外は一つの墓で一つの土器が出土している（北京市文物研究所 2007）。そのため、全ての墓において、夾砂系土器もしくは泥質系土器のどちらか一方の土器が副葬されていることとなる。出土状況は西部地区での出土が少ない以外は、平均的に拡がっている（Figure 6）。また、泥質系土器は東部地区の二号取土坑の南側を境に、南側に出土が集中している。数は少ないが、一号取土坑を挟んで中央部の南側で泥質系土器が 2 点出土していることから、二号取土坑の南側から中央部の南側にかけてのラインが泥質系土器の出土の境となる可能性がある。

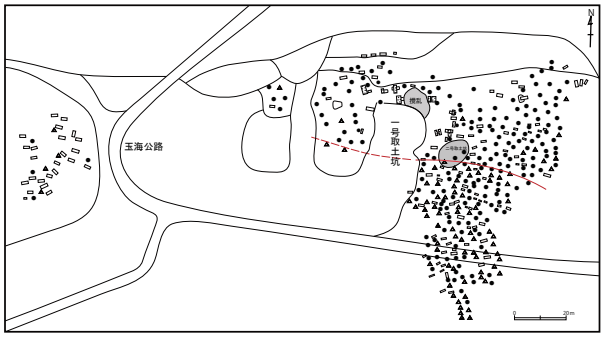


Figure 6　土器
●夾砂系土器　▲泥質系土器

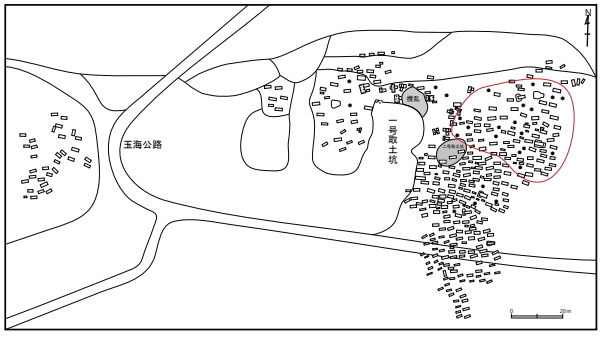


Figure 7　七形飾金具
●七形飾金具

七形飾金具

ここでは、七形飾金具のうち上端に動物の装飾を施すものを取りあげる。七形飾金具の出土状況は顕著な傾向を示しており、25 点中 17 点が東部地区の北部に集中している（Figure 7）。

その他の発掘地区では、反対に極端に出土数が少なくなる状況が見て取れる。

覆面銅扣

玉皇廟遺跡の埋葬習俗の特徴として、覆面習俗を挙げることができる。死者の頭骨の眼部や鼻部から銅扣が出土しており、銅扣の裏面に麻布の痕跡が確認されている。これらのことから、もともとは銅扣を縫いつけた麻布が死者の顔を覆っていたと考えられる。玉皇廟遺跡では、400 ある墓のうち 207 の墓で覆面に縫い付けられたと思われる銅扣が出土している（北京市文物研究所 2007）。銅扣の分布状況は、墓地の西部地区での出土が少ない以外は、平均的に出土している（Figure 8）。



Figure 8　覆面銅扣
●覆面銅扣

まとめ

これまでの検討を簡単にまとめると、どの墓も同時に 2 種類以上の型式を副葬しておらず、遺物の種類と型式ごとに分布に違いが出てくるということが分かった。このことから、死者の埋葬に際して、副葬する遺物の種類とその型式を取捨選択していた可能性を指摘することができる。

遺物の広がり方からは、発掘区域はまず地理的に離れ、遺物の出土も極端に少ない西部地区と、他の発掘地区とを区分することができる。他の発掘地区については、動物形飾金具の出土状況によって、最も細か

く区分することが可能であり、他の遺物の出土状況も動物形飾金具の出土状況と対応しているように思われる。

具体的には虎形飾金具、獣面型の短剣、夾砂系土器を出土する中央地区、虎・馬形飾金具、夾砂系土器、匕形飾金具を出土する東部地区北部、泥質系土器を出土し動物形飾金具を出土しない東部地区中央部、犬形飾金具、蛇型・動物紋型の短剣、泥質系土器を出土する東部地区南部に区分できる(3)。覆面銅扣は、西部地区以外に広く分布しており、玉皇廟遺跡の埋葬儀礼を特徴付けるものといえる。

以上のことが、今回の考察によって分かったことである。ただし、遺物の広がりから考えられる遺跡の区分が、遺跡の形成とどのような関係を持っているのかについては、明らかにすることができなかった。そのため、遺跡全体の編年を視野に入れた、総括的な考察を今後の課題としたい。

註

(1) 玉皇廟遺跡の遺構、および副葬される動物骨の特徴を抽出し、内蒙古中南部、寧夏地域との比較を行った。

(2) 本稿における玉皇廟遺跡の区分は便宜的なものにすぎず、本来は一号取土坑にも当時の墓が存在していたものと思われる。

(3) 既に上述していることであるが、本来は一号取土坑にも墓が存在していたはずであり、今回考察の対象とした遺物も一号取土坑に存在していた墓に副葬されていたことは、十分考えられる。しかし、現時点ではこれ以上踏み込むことができないため、議論の対象とはしない。

参考文献

小田木治太郎 1997「中国北方「青銅器文化」の墓」『宗教と考古学』pp. 437-471　勤誠社

宮本一夫 2000『中国古代北疆史の考古学的研究』中国出版社

八木聡 2008「北方系文化の埋葬習俗－玉皇廟遺跡を中心に―」『金大考古 61 号』pp. 20-28

北京市文物研究所 2007『軍都山墓地　玉皇廟』文物出版社

(e-mail:eldissa06@yahoo.co.jp)